

C

2024
JANUARY
[第2002回]

鮮鋭で力強い構成感に独特のユーモアが光る

セルゲイ・プロコフィエフ

Sergei Prokofiev (1891–1953)

プロコフィエフは、苦難の時代を生きた作曲家だ。サンクトペテルブルク音楽院を卒業してまもなく、世の中は第1次世界大戦、ロシア革命という混乱の時代に突入し、ストラヴィンスキーやラフマニノフといった年上の作曲家たちは次々にロシアを離れてゆく。プロコフィエフ自身は、いわく「遠からず母国に戻る」つもりで拠点を海外へと移したものの、20年近くを経てソ連へと帰国。スターリンの文化政策による制約のなかでも、鋭いセンスとユーモアを含んだ作品を多く残した。

プロコフィエフとチェス

幼い頃から音楽の才能を発揮したプロコフィエフは、同じ頃からチェスの面白さにも目覚めていた。その腕前はなかなかのもので、学生時代の音楽院ではピカイチだったようだ。チェスのトーナメントや試合にもたびたび参加して元世界チャンピオン・カパブランカと手合わせをしたこともあり、その後、彼とは友情を育んでいる。

チェスを両家の抗争と見立て
《ロメオとジュリエット》の
曲想を練るプロコフィエフ
イラストレーション ©IKE

